

Kagoshima University Research Center for the Pacific Islands

島嶼研だより

No.69

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

2015年3月

 主な記事

地の利を得た鹿児島島嶼学の強みと可能性 (長嶋俊介)	p1
学生奮闘記「ウミガメを食べる」 (西條喜来)	p3
フィールドこぼれ話「未知の魚を求めて」 (本村浩之)	P9
連載 とうがらしに旅して 第十回「薩摩蕃椒」 (山本宗立)	p10

地の利を得た鹿児島島嶼学の強みと可能性

国際島嶼教育研究センター 長嶋俊介

1960年代(大学受験時)から島学を志してきたものとして、九州・鹿児島は地の利が魅力であった。最近『Island of Kagoshima』『九州広域列島論』でデータ確認を始めて、「全国一の島嶼県振り」に改めて気付かされた。これを伝えずに大学を去るわけにはいかない。①離島面積は長崎県の1.6倍、沖縄県の2.4倍。本島も入れた100%島嶼県沖縄総面積対比でも鹿児島県離島の方が13%広い。長崎は離島振興法枠内だけ1番宣言をしていたに過ぎない。それ程に奄美群島の追加存在は大きい。九州地方全離島面積比でも49%が鹿児島県となる(北方領土は絶大なので準1位か)。②離島人口でも1位。自称1位長崎県の22%増し、沖縄県の31%増しである。③架橋島淡路島を除く人口最大島は、2010年国勢調査から、奄美大島になった。佐渡を1380人も上回り逆転した。因みに全国離島に占める九州地方人口比率は70%(沖縄本島も島嶼に組み入れると90%にも達する)。④排他的経済水域でも九州・沖縄の果たす役割は多大である。全国の1/4相当と思われるが(県別寄

与データは未公開)、2012年沖ノ鳥島北域が国連大陸棚限界委員会で日本EEZに認定された。駐パラオ日本大使も「九州パラオ海嶺の上に沖ノ鳥島あり」と強調していたが、まさに九州繋がりEEZの追加である。沖ノ鳥島南部の追加認定があれば、東京都並みの海洋圏九州貢献となる。

鹿児島は島学環境でも全国屈指である。色濃い文化の多様性・個性的世界が島群毎にある。頻繁に接するほどその深みに魅了される。島類型の多様性と、直線距離602kmにわたる南北の島繋がり(それは台湾にも朝鮮半島にも繋がるセンター域)、気候・文化・社会の推移域的連続性と重層構造がある。鹿児島からワンクッションおこななくても、直接多頻度で真離島(離島中の離島で、韓国語では「落島」)に関わる贅沢もある。陸域内多様性の島世界(出身地佐渡)と真逆の熟知空間を得た。その十島・三島・口永良部島・甌島・与路島・請島関係者各位との11.5年間はまさに宝であった。深く感謝したい。

(2) 島嶼研だより No. 69

1998年日本島嶼学会設立に於いては、同年国際島嶼学会モーリシャス大会で7月設立総会を告知し、スポンサーを得て会長を豪州から招致した。その時4月改組したばかりの多島圏研究センター員も参加しており、国際シンポジウムThe Ryukyu Islandsのポスターを会場で示していた。第1回1999年次大会を、鹿児島大学で開催することにも繋がった。1998年末奄美で地方特別大会、2006年次大会を奄美大島、2011年次大会を徳之島で開く展開がそれに続く。奄美群島での全国規模学会は初めてだったこともあり、熱気・盛り上がりが異様で、会場を複数化し同時進行にした。徳之島では3町順開催とした。海外から戻って発表する人も含めて、17名19件の地元発表があった。奄美群島のこの学問熱は、2015年にオープンする当センター奄美分室諸活動（センター員交替常駐）で、寄与貢献を意識せざるを得ない必然でもある。

中央官庁勤めをしていた頃、隣の霞が関ビル一階にナウル航空事務所があった。鹿児島発太平洋国際便が当時あり、太平洋学会仲間達はその便を使い調査に出ていた。南海研（多島研前身）の船舶での調査と合わせ、当時から国際島嶼調査でも地の利を發揮していた。七高の威光・行政分離での南端地期間・西南戦争での理系特化高等教育機関・これらの事情もあってか、科学的研究力の確かさが伝統化されていた。

その文部科学省省令施設としての伝統ある研究センターに短期間とはいえ在籍出来たことは、最高度の幸運であった。

海外調査が船舶から航空機に完全移行した直後からの勤務であったが、水産学部調査船南星丸での宇治群島・臥蛇島・硫黄島（沖縄県）調査、理学部地震・GPS計保守・調査同行での臥蛇島・横当島無人島調査も特筆すべき思い出である。地の利・学術環境の利である。

海外にはミクロネシアの離島中のさらに離島を箱庭中のようにほぼ毎年訪れる機会を得た。パセンジャーではなくリピーターとしての訪問は、文献学・データ学・単一専門性制約を乗り越える上でも、貴重で贅沢な機会となった。1979年から続けてきた全世界島嶼国訪問を在職中に達成できた。地元新聞でも「世界の島々撮り歩き」連載を夕刊で2年ほどさせていただいた。第1回国際小島嶼文化会議を鹿児島大学で、第5回大会を佐渡で開催した。鹿児島大学からの参加数は常にトップであったが、三島・十島村役場・奄美の里が鹿児島市内にあることの恩恵にも浴した。毎年外国人客員島嶼研究者を迎え長期交流もできた。島学に関わる地の利・人の輪は全国区であるのみか、世界クラスである。それらの拠点としてのセンターの役割充実と飛躍的發展に（4月からは外からになるが）大いに期待したい。



横当島（十島村最南端）山上にも産業痕跡（ピロー採取・索道施設）があった（2014年10月調査）

学生奮闘記

ウミガメを食べる

西條喜来（鹿児島大学理工学研究科）

私には愛してやまない生き物がいる。ウミガメである。鹿児島は離島域にもウミガメの産卵場となる砂浜が多く残っており、まさにウミガメの聖地と呼ぶにふさわしい。昔、鹿児島には砂浜に産卵に来たメスのウミガメや産み落とされた卵を食べる文化があった。地域によってはウミガメ漁が存在し、泳いでいるウミガメを鉾で突き捕っていた。しかし、営利目的の卵の盗掘などがきっかけで、1988年に鹿児島県ウミガメ保護条例が施行され、鹿児島でのウミガメ食文化は消滅した。

去年、島嶼学概論Ⅰ・Ⅱを受講した際に太平洋島嶼学特論へのお誘いが来た。この授業で訪れるマイクロネシア連邦チューク州に属するピス島は、ウミガメの食文化が未だに残っている数少ない地域である。ピス島で食べられているアオウミガメは絶滅危惧種に指定されており、日本では小笠原諸島でしか食べることができない。おまけに、ピス島ではイヌまで食べる習慣があるという。ウミガメを一度は食べてみたかった私は、この機会を逃すわけにはいかないと思い、初めての海外旅行でピス島へ行くことを決心したのである。

現地に行ってみると、禁漁期間につきウミガメを食べることはできず肩を落としたが、甲羅の長さ20cmほどのアオウミガメの幼体をバケツに入れて見せてくれた。現地の言葉も分からず、私の英語力不足もあって詳しい話は聞けなかったが、どうやらウミガメはとても身近な存在だが日常的に食べているのではなく、お祝い事や特別な日に食べることが多いようだ。ウミガメを食べることのできなかつた私たちに、ピスの人々はイヌをご馳走してくれた。さっきまで元気に走り回っていたイヌを、バナナやココヤシの葉で何十にも覆って蒸し焼きにした。お客である私たちには一番美味しいあばらのお肉を食べさせてくれた。犬臭さが残るくせのある味が印象的だった。

生物の保全と食文化は、その命に敬意を持ち続ける限り共存できるのでは、と感じた。食文化があるからこそ、その対象に関心を持ち続け、その生態や行動を深く知り伝えることができる。かつて鹿児島の離島域でもそうであったように、今のピスの人々にとってウミガメは神聖な生き物であり貴重な資源なのである。ここに環境保全や自然保護といった概念は必要ないのかもしれない。



海岸にて犬を調理



ピス島でウミガメと

鹿児島大学シンポジウム 「島嶼災害の特徴と防災」

平成 27 年 1 月 31 日（土）に鹿児島大学国際島嶼教育研究センター・鹿児島大学地域防災教育研究センター主催で鹿児島大学シンポジウム『島嶼災害の特徴と防災』が開催されました。当日は多数の方に御参加いただき、盛会となりました。

基調講演

島嶼の自然災害（火山等）と防災を考える

小林哲夫

（鹿児島大学理学部）

鹿児島島の南方海域にはいくつかの火山島（薩摩硫黄島、口永良部島、口之島、中之島、諏訪之瀬島、横当島、硫黄島）が存在している。今回の講演では歴史時代に大噴火をした桜島（当時）と諏訪之瀬島を例に、離島における防災についての考えを報告する。



小林哲夫先生

シンポジウム・島嶼災害の特徴と防災

1) 災害時のコミュニティFMの役割

麓 憲吾

（特定非営利活動法人ディ！）

あまみエフエムは 2007 年に九州管内初の離島の開局となり、島ツチュの島ツチュによる島ツチュのための島ラジオとしてアイデンティティの獲得をテーマに島の情報に特化したコミュニティ FM である。2010 年の奄美豪雨災害時では災害情報を 24 時間 5 日間連続放送し、マスメディアでは伝えられない情報を届けた。災害時の情報伝達や活動が、平時のコミュニティにおけるコミュニケーションの成り立ちにより、減災へと結びつけることを報告する。

2) 島嶼の自然と津波防災—奄美型の避難計画を考える

岩船昌起

（鹿児島大学地域防災教育研究センター）

地形との関連で津波防災を考えると、標高数 m の「沖積平野」上に立地する集落は、標高数 10m の「海岸段丘」上の集落よりも被災しやすい。一般に「高い島」と「低い島」に大別できる南西諸島の島々の中で、奄美大島は山地・丘陵地が突き出た「高い島」であるが、人々の大半は海沿いの沖積平野に居住している。また大島では“お元気”であるものの体力レベルが若



岩船昌起先生

島では“お元気”であるものの体力レベルが「若
要支援者」の割合も高い。自然度が高い山地に
危険生物のハブや希少生物のアミノクロウ
サギなどが生育しており、世界遺産指定間近で
観光資源として自然の保護・保全も図る必要が
あることを考慮すると、防潮堤や高台の避難所
など防災施設の整備よりも、都市域外での車を
活用した避難計画など、奄美型の津波防災施策
を総合的に講じるべきであろう。



大岩根尚先生

3) 三島村硫黄島:火山の恵みと防災

大岩根尚

(三島村ジオパーク)

三島村の薩摩硫黄島は、鬼界カルデラの北西
縁に位置する火山島である。島の東部に位置す
る活火山の硫黄岳からは現在も活発な噴気や
熱水による海水の変色が見られ、見事な景観を
なしている。島民は海沿いの低地を居住地とし
ながら、1000年ほど前から硫黄や硅石の採掘の
ために硫黄岳火口までの登山を続けてきた。また
近年では硫黄を使った花火や、温泉の海での
シーカヤックなどを企画しており、火山の恵み
を多く受けて生活している。一方で2013年には
小規模な噴火も起こっており、行政としては
災害を警戒し続けている。警戒の一環として、
全島民が参加する避難訓練を毎年行っている。
本講演では、硫黄島の火山を活かした取り組み
と防災訓練の実例、その中での小規模離島なら
ではの課題について紹介する。

4) 島嶼災害の特徴多様性と地域社会

長嶋俊介

(鹿児島大学国際島嶼教育研究センター)

島嶼性の強い地域での災害には、特有の傾向
がある。遠隔・隔絶、狭小・低島、環海・高島
は、それぞれ救援・予知・避難指示・避難方法、

被災強度・速度・頻度、波及期間等に影響を及
ぼしてきた。安全・安心・安定的島嶼生活は、
その持続可能性の前提である。耐えて凌ぎ乗り
切るための団結力と知恵と工夫は、島文化・技
術・社会ルールの骨格をなしてきた。また災害
による集団移住経験等も枚挙に暇がない。地球
温暖化・異常気象・人災の危機にも対応できる
現在的・近未来的な最先端の対応とは何なのか。
「水と光の革命」以降克服してきた諸リスク対
応史を総括し、島に生きる主人公たちを支える、
総合的・総括的で機動力確かな防災システム・
災害対処ガバナンスを考察する。



総合討論：長嶋先生、麓先生、大岩根先生、岩
船先生、小林先生（左から）

国際シンポジウム「学融的研究の挑戦 —太平洋島嶼における自然資源利用—

平成 27 年 2 月 7 日（土）に鹿児島大学国際島嶼教育研究センター主催で国際シンポジウム「学融的研究の挑戦 —太平洋島嶼における自然資源利用—」が開催されました。当日は多数の方に御参加いただき、盛会となりました。

基調講演

1) Integrated Coastal Management Initiative in Gau Island, Fiji: The Activities and the Interesting Lessons Learned (Veitayaki, J.・南太平洋大学・フィジー)

2) Re-examining the Rural Economy in the Pacific Islands: Accounting for Natural Resource Use by Women in Coastal Communities (Bidesi, V.・南太平洋大学・フィジー)

報告

1) Factors Influencing the Natural Resource Use in Semi Self-sufficient Communities (西村 知・鹿児島大学法文学部)

2) Change and Challenges of Resource Management System in Fiji (鳥居享司・鹿児島大学水産学部)

3) Comparison of Fisheries Management in Fiji (Kitolelei J.・鹿児島大学水産学部)

4) Comparison of Dietary Habit for Fijian Local People Using Stable Isotope Ratio (小針 統・鹿児島大学水産学部)

5) Bivalve Resources Use by Local People in Fiji (河合 溪・鹿児島大学国際島嶼教育研究センター)

国際島嶼教育研究センター研究会発表要旨

第 153 回 2014 年 11 月 17 日
ニュージーランドにおける修復的司法および少年司法

Mousourakis Georgios
(鹿児島大学国際島嶼教育研究センター)

過去 30 年以上、「修復的司法」として知られる、犯罪と犯罪性に対する社会の反応に関する新たなアプローチは、世界中で普及してきた。この革新的なアプローチは以下の 3 つの考えを主要なテーマとしている。すなわち、犯罪は第一義的に、被害者、犯罪者およびコミュニティの関係性の侵害である、という考えである。

続いて、司法手続の主要な目的は、違法な行動によって直接影響を受けた者たちの被害を扱うと同時に、彼らを和解させることでなければならない、とも考える。さらには、犯罪に関連した衝突の解決は、被害者と犯罪者の双方の側の積極的な努力、およびコミュニティによる責任の引き受けを要求する、とも考える。近年、多くの注目を集めてきた修復的司法実務は、カンファレンスというものである。カンファレンスとは、本質的に被害者と犯罪者の調停手続の延長線上にあるものである。それには犯罪者と被害者だけでなく、彼らそれぞれの家族やその他のコミュニティの成員といった、彼らのよ

り広い「保護のコミュニティー (communities of care)」をも含む。それは、若い犯罪者、被害者、そしてその家族を、「公正な」結論に関するグループの同意に到達するという目的を持った決定のプロセスに関わらせることを目指す。同時に、それは犯罪者の、彼や彼女の行動が及ぼす衝撃に対する意識を促進させ、犯罪者と被害者の双方が、中心的なコミュニティーのサポートシステムに再度つながることができるようにすることを追及する。「ファミリー・グループ・カンファレンス (FGC)」として言及されるニュージーランドにおけるカンファレンスは、『子供、若年者およびその家族法 (CYPFA)』の導入に伴って、1989年に少年司法制度に組み入れられた。この法はある意味では、司法制度は彼らの伝統的文化的価値に対して、より敏感であるように、というマオリ族の要求に応えたものとして現れた。そしてそれは、少年司法および家族の福祉の問題を扱うためのアプローチに関して、重大な変化をもたらすものであった。この報告は、より広い修復的司法哲学との関連において、ニュージーランドにおける「ファミリー・グループ・カンファレンス」の機能を分析するものであり、少年犯罪と関連する問題を扱うカンファレンス・システムの役割を評価するものである。

第 154 回 2014 年 12 月 26 日
古代ギリシアの農業：農業用テラス（段々畑）について—エーゲ海の島嶼の場合—

伊藤 正
(鹿児島大学教育学部)

古代ギリシア語にはテラスに当たる言葉がない。現代ギリシア語にはテラスを示す二つの言葉が知られている。一つは、stepped terraces を示す skala と、もう一つは、narrow high terraces を示す skamata である。Rackham / Moody はテ

ラスのタイプを三つに分類している。Lohmann に拠れば、古典期に建設されたテラスは parallel-step タイプであったとされるが、これは Rackham の分類では、stepped terraces に当たるもので、現代ギリシア語の skala と呼ばれるタイプのものである。このタイプのものは、わが国において棚田あるいは段々畑と呼ばれているものである。このタイプの農業用テラスはわが国に限らず、世界の至る所で、あらゆる時代に確認できる。中世以降、段々畑はエーゲ海キクラデス諸島の田園景観の特徴の一つである。本発表では、古代ギリシアにおける農業用テラスの有無について、クレタ島、アモルゴス島およびデロス島の事例を中心に考察する。

第 155 回 2015 年 1 月 30 日
南太平洋の人類移動—自然環境との関わり—

森脇 広
(鹿児島大学法文学部)

南太平洋のメラネシアからポリネシアにいたる東方への人類の移動・拡散過程は大きな関心事の一つである。これと関わる自然環境について次の二点から考える。第一に移動の起点であるビスマルク諸島、ニューブリテン島と終点の一つであるニュージーランドにおいて、火山灰編年の果たす役割を考える。第二にクック諸島における海岸低地・植生の変化を紹介する。東ポリネシアの西縁にあるこの諸島は、人類の移動過程の一つの謎とされる西ポリネシア・東ポリネシア間の年代ギャップを明らかにする上で、鍵となる位置にある。クック諸島最大の島であるラロトンガ島を中心に海岸低地と植生変化の知見がこれとどう関わるかを考える。

第156回 2015年2月9日
島を巡る紛争と「解」—教訓的・事例的考察—

Godfrey Baldacchino
(マルタ大学)

この研究会では、小島嶼の歴史的パラドックスを概説する。島々の直接的な戦利的価値は、無視すべき程の利権であっても、地理戦略的・象徴的・士気喚起的理由では、決定的な違いがあるために重要とされてきた。ここ数十年間においては小島嶼の存在による排他的経済水域への寄与が追加された。本報告では、尖閣諸島をめぐる日中間の紛争の概要から論を始める。次に地域の大規模な対立の一部として小さな島を荒廃させた(島自体に利害関心がある場合はそれほどのことにはならない)歴史的ケースを調べる。最後に、ゼロサム・ゲーム(利得の総和が常にゼロ)であるかのように見える紛争に

対して、別の『解』を考える上での、教訓的ヒントを、過去から今に至る島嶼例をもとに提示する。ここでは、南極大陸、スヴァールバル諸島、オーランド諸島、セントマーティン島、ヴァヌアツ等を事例として考察する。



Prof. Godfrey Baldacchino

お知らせ

(1) 着任

外国人客員教授としてオークランド大学の Mousourakis Georgios 氏が着任いたしました。招聘期間は平成26年11月4日～平成27年3月30日までです。研究テーマは「太平洋圏の国々における紛争解決へのアプローチの比較による研究」、専門は法学です。

最近の出版物

南太平洋研究 (South Pacific Studies) Vol.35, No.2, 2015

Research Papers

OTSUKA Y. and TAKAOKA H.: Biogeographical Distribution and Phylogenetic Analysis of *Simulium* (*Wallacellum*) (Diptera: Simuliidae) based on the Mitochondrial Sequences

Information

REHMAN H. U.: Environmental Degradation (Dumped Vehicles) in Major Islands of the Federated States of Micronesia

～フィールドこぼれ話～

「未知の魚を求めて」

本村浩之（総合研究博物館）

「あら、本村さん日本にいらっしゃったのですね」。大学のキャンパスで歩いているとよくその声をかけられます。確かに年間 200 回以上飛行機に乗る年もあります。しかし、誤解を解くためにここで明言しておきますが、ふつうは海外渡航を年間 20 回以下に抑えて、大学の仕事を粛々とこなしながら鹿児島で多くの日々を過ごしています。海外出張の多くは、国際的な委員会や大学・研究機関での教育活動のために招聘されています。しかし、一部ではあるものの、自身の研究活動の一環としてフィールド調査や研究機関に所蔵されている標本の調査も行っています。

私は魚の研究をしています。海はつながっていますので、世界がフィールドです。ヨーロッパや北米、オセアニアはもちろんのこと、研究を進めるために政治的に混乱している国や地域にも行きます。海外渡航中には、日本では決して経験できない様々な出来事に遭遇します。例えば、宿泊したホテルに爆弾が仕掛けられ、真夜中に下着姿のまま避難したことがあります。その姿が撮影されて翌日の新聞の一面に。タイトルは「逃げ惑う宿泊客たち」でした。また、訪問していた魚市場でスリが発生し、犯人を取り押さえた民衆が目と鼻の先で犯人の腕を切断したこともありました。就寝中に宿泊部屋の窓ガラスに銃弾が撃ち込まれたこともあります。目の前でカーチェイスが繰り広げられ、車を乗り捨てた逃亡者が私のほんの 1 メートル前で射殺されたこともありました。さらに、左手が不浄とされる国でつい魚を左手で触ってしまい群集に囲まれリンチ寸前の窮地に立たされたこともあります。その時は雇っていたタクシードライバーにさながらハリウッド映画のように救出してもらい事なきを得ました。狂犬病にかかった犬に追いかけられた時は、無事民家に逃げ込んで助かったのですが、そこで振る舞われた飲み物によって赤痢に感染してしまいました。財布のスリにあった時は犯人を追いかけ、ドロップキックによって撃退し、財布を取り戻しました。空手、柔道、レスリングと若いころに鍛えた体と技が生きた瞬間でした。このように、さらにはここには書ききれないほどの数々の出来れば避けたい経験をしています。おかげで危険を察知・回避する能力に長けてきた気がします。人知の及ぶところではない危険な出来事は運に左右されますので、対処の方法がないのですが・・・。

なぜ、安全ではない調査に向かうのでしょうか。それは“そういうところにこそ未知の魚がいるから”です。これまでに誰にも知られていなかった魚を発見した時の醍醐味については説明するまでもないでしょう。フィールド調査は万全の準備と現地の風習や習慣などの情報の入手から始まり、危機管理をしっかりと実施する必要があります。「大胆な行動」と「細心の注意」のバランスに気を付けて調査を行えば、最大限の成果が得られるのです。さて、この原稿を提出したら、フィリピンとフィジーの安全な旅に行ってきます。



ボルネオ・サラワク州のバタンルパー河にて。ここで全長 1 メートルに達する新種のツバメコノシロ科が発見された

🌿 「とうがらしに旅して」 🌿

第十回 「薩摩蕃椒」

鹿兒島には「薩摩蕃椒」と呼ばれる唐辛子がある。実はその来歴を寡聞にして知らない。農林水産省には品種登録されていないようだ。スーパーや物産展等で売られているほか、インターネット上でも購入可能である。薩摩藩主島津重豪の命で編纂された日本で最初の本格的博物誌『成形図説』（1804年）には、櫻番椒（サクラタウガラシ）、垂番椒（サガリタウガラシ）、梅番椒（ムメタウガラシ）、檳實番椒（エノミタウガラシ）、黄番椒（キタウガラシ）、雑色番椒（イロマジリタウガラシ）、江戸番椒（エドタウガラシ）、一丈紅、鷹の爪、胡頹（ぐみ）胡椒、天上守（てんしやうまもり）、下（くだり）胡椒、金柑唐辛子などの名称が見受けられるが、「薩摩蕃椒」は出てこない。話はそれるが、本書に「本藩南邊に生ふるはいよいよ太くいよいよ辛し」や「蝮蛇咬に番椒の粉を酢にてときつくべし」とあるのは興味深い。1735年から1738年頃に作成された『享保・元文諸国産物帳』の九州における唐辛子には、榎子番椒、烏帽子番椒、まるごせう、圓（まる）番椒、大番椒、鬼灯番椒、兜番椒、金番椒、櫻ごせう、桜番椒、千のやさき、千矢番椒、千生番椒、竹節番椒、つきがねごせう、のぼりごせう、八生番椒、天笠番椒、針番椒、ふさなりごせう、蚯蚓番椒、四頭番椒が記載されているものの、やはり「薩摩蕃椒」は出てこない。『聞き書 鹿兒島の食事（日本の食生活全集）』にもない。いつ頃から「薩摩蕃椒」という名称が用いられたのか、非常に気になるところである。（山本宗立）

編集後記

1月に大学院全学横断的プログラム科目の島嶼学概論Ⅱで十島村の中之島に学生と行きました。十島村は移住（Iターン・Uターン）の助成制度があり、人口がわずかですが増えているそうです。牧場で鹿兒島県の天然記念物であるトカラ馬の世話をしている人はホンジュラス出身の人でした。これも一種のIターンと言っていいんですね。（大塚 靖）



鹿兒島に帰るフェリーとしまの前で

島嶼研だより No. 69 平成27年3月15日発行

発行：鹿兒島大学国際島嶼教育研究センター

〒890-8580 鹿兒島市郡元 1-21-24

電話 099(285)7394 ファクシミリ 099(285)6197

電子メール shimaken@cpi.kagoshima-u.ac.jp

WWW <http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/index-j.html>